

白線 の 彼 方

Mu

「あ～あ、疲れたな」

暗くなった夜道を歩きながら綾子はずぶやいた。陸上部の練習で遅くなったのだ。心なしか足元がふらついている。

だけど、わたしたち3年にとってはこれが最後の大会だもの。仕方ないか。

彼女はそう思い直すと今度はその考えをもう一度心の中で繰り返した。

これが最後なんだなあ。もう高校3年間も終わっちゃうんだ。

わたし何も出来なかったのに。なんだか短すぎるよ。

あ～あ、せめて、この大会は精一杯走りたいなあ。

出来たら自己タイムを更新して。

あは、無理かなあ。

ううん。でも、頑張って走りたい。

最後は、心に残る競技会にしたいもの。

ふう。

彼女は夜空を見上げた。夏の終わりの空に星が綺麗に輝いている。

彼女の口から自然に祈りが流れ出た。

「お願いします、お星さま。いい大会になりますように」

その時だった。

彼女のからだは急に前のめりになって崩れ落ちた。

「きゃっ！」

夜空を見上げながら歩いていた彼女は足元の段差に気づいていなかったのだ。

疲れていたこともあり踏ん張りがきかず、そのまま道に倒れてしまった。

闇雲にさしだした腕で地面を支えて、かろうじて顔から倒れるのはまぬがれた。彼女はあわてて立ち上がろうとして足を踏ん張る。

その時、右足に激痛が走った。

「痛い！」

しまった！ まさか、捻挫？

心臓がドキドキと暴れ出し冷や汗が流れる。

どうしよう、もう2週間しかないのに。どうしよう……。

手で足首をかばいながら、そろそろと立ち上がる。

彼女は右足をかばいながら、ゆっくり歩き出した。

頭の中は後悔で一杯だった。

家に帰り着くと、すぐに自分の部屋に入って座り込んだ。

靴下を脱ぐと両手で足首を動かしてみる。最初はそっと、そして次第に力を入れて……。

そうすると、やはりそこに痛みがあるのが分かった。

彼女は小さくため息をついた。

ああ、やっぱり、少し傷い。

それでも自分の部屋に帰ってきたせい、心はさっき夜道を歩いていたときよりは落ち着いてきた。

バカだったなあ。よそ見なんかして。本当に、綾子のバカ。

彼女は戸棚の上から救急箱をとって湿布薬を取り出した。

とにかく治さなくっちゃ。

何が何でも、治さなくっちゃ。

湿布を貼って包帯を巻きながら、彼女は思った。

大丈夫だよな？

そんなひどくないよね？

……ただ、転んだだけだもの。

だけど……明日のクラブどうしよう？

休みたくないなあ。もう時間無いんだ。

少しぐらい痛くたって、できるよね。

彼女は靴下をはき直すと立ち上がった。もう一度、軽く足を振ってみる。

湿布を貼ったからか、さっきより痛さが和らいだ気がした。

でもまだ、少し痛いかなあ。

まあ、明日の状態を決めよう。

ほんとに、用心しなくちゃ。ほんとに……。

それから彼女は夕食のために部屋から出て行った。

翌日、目を覚ました時、彼女は真っ先に足首のことを思い浮かべた。

ベッドから身を起こして恐る恐る右足を動かしてみる。

痛みは消えていた。

さらに手で足首を押してから床で軽く歩く動作をした。

痛くない！

ああ、よかった。何とかかなりそうだ。

「練習、いつも通りできそう。よかったあ」

ホッと安心して彼女はつぶやいた。

「綾子、行こ！」

「あっ、敦（あっ）ちゃん。うん、ちょっと待って」

その日の放課後、同じクラブの敦子が練習に誘いに来た。

綾子はユニフォームを鞆から取り出して一緒に歩き出す。更衣室に行く途中、敦子が言った。

「綾子、がんばってね。うちの3年の女子で入賞出来そうな綾子ぐらいなんだから」

「そんなあ。敦ちゃんだって、この前準決まで行ったじゃない。もう少しがんばれば、敦ちゃんだって」

「うん、そうね。わたしも3年間の成果に今度こそはって思うの」

綾子はその言葉をかみしめた。

みんな同じなんだ。みんな同じ想いで、今、最後の大会に望もうとしているんだ。

わたしだって……

彼女は強く想った。

準備運動をしながら綾子は右足のことが気になりだしていた。

朝、全く消えていた痛みが、少しではあるが感じられるのだ。

彼女はあえてその痛みを忘れようとした。そうして、大丈夫だと自分にいいかせる。

それでも、自然と注意が右足首にいて少しかばいながら練習をした。

彼女の専門は短距離200メートルである。

軽い流しのトラック数周が終わった後、スタートからダッシュの練習に移った。

その数回目。

ダッシュした瞬間にかばっていた足に激痛が走った。

綾子は一瞬立ち止まりそうになって、それを必死にこらえて走った。

うわー、どうしよう？

心臓が動揺で速くなる。焦りが頭の中を埋め尽くした。

どうしよう？ どうしたらいい？

みんなには知られたくなかった。

知られれば練習を休まされるだろうし、心配をかけることにもなると思った。

かといって、どうしたらいいのかわからなかった。

痛みをこらえて走りきった後、彼女はようやく思った。

とにかく今日は、やれるところまでやろう。なんとか走ろう。

そうしか考えられなかった。

彼女は痛みをこらえながら、この日の練習を続けた。

幸い誰も彼女が時々見せる苦痛に歪む顔に気づかないようだった。

練習が終わってから、彼女は足を引きずるようにして帰った。

心の中は足に痛みが走るたびに重くなっていった。

.....どうしよう？

やっぱりダメなのかな？

ううん、なんとか治さなくっちゃ。

なんとか.....

彼女は帰りに医者に寄って治療を受けた。

医者は、やはり、しばらく動かさない方がいいと言った。

でも、彼女はクラブを休みたくなかった。大会を前に練習を休むことの不安が大きかった。

もちろん、怪我を治すことがそれ以上に大切だと彼女にも分かっていた。

しかし、どうしても思いきることができなかった。

彼女はそれから3日間、痛みをこらえて練習を続けた。

そして、毎日医者に通ったのだった。

怪我をして4日目。

何回かの全力疾走の後、綾子はトラック内で腰を下ろして休んでいた。痛みのある右足首を軽くさすりながら。

クラブのみんなはまだ気づいてないようだったが、さすがにスピードが上がらなかったから、どうしたの？ と訊かれることもあった。そんなとき彼女は「うん、ちょっと調子がね」と言って笑ってごまかしていた。

と、そのとき。

「綾ちゃん」

声をかけられ振り向くと同じクラブの同級生、三輪武司が立っていた。慌ててさすっていた手を隠す。

「三輪くん……なに？」

彼はその言葉に応えず、つかつかと彼女の横に来るとしゃがんで、彼女が今までさすっていた右足首をいきなりつかんだ。

「痛い！」

綾子は思わず声をあげた。言ってしまって、ハッとする。

「やっぱり……。綾ちゃん、怪我してるだろう？」

「う……」

彼はつかんでいた手を離し、今度は彼女の足首をさすりだした。

「数日前から足をかばって走ってただろう。なんか変だった」

綾子は何も言わずにうつむいていた。

「ダメだなあ。怪我してるんなら、そう言えよ。だいぶ酷いんだろう？」

彼女は顔を上げて武司の姿を見つめた。けれど、彼は俯いて彼女の足首をさすっている。

「三輪くん……」

「ん、なんだ？」

「……内緒にしといてくれる？」

彼女の声は少し震えていた。

武司が顔を上げる。その視線が普段より厳しかった。

「綾ちゃん……」

「ね、お願い。わたし、休みたくないの。今休んだら間に合わないかもしれない。だから、お願い。みんなに言わないで。それに……そんなに酷くないもの。大丈夫よ。だから……」

彼女は早口で一気に言い募る。彼はそれを遮るように言った。

「だめだよ。なにが、酷くないもんか。こんなに腫れてるじゃないか。ほら」

そう言いながら彼はもう一度、しかし今度はずっと軽く足首を押した。

「うっ」

彼女はそれでも顔をしかめる。

「ほら、そんなに痛いんだろう。たぶん、もう歩くのだから辛いくせに……。休めよ。休んで、この足治す方が先だろう」

「でも……」

綾子がつぶやいた。つぶやきながら彼の言う通りだと思っていた。

けれど、やはり思いきれなかった。休みたくなかった。

「綾ちゃん、走れなくなってもいいのか？ このままじゃ、悪くなるだけじゃないか。休めよ」

武司は彼女を見つめていた。そして綾子も……

彼の瞳にその真剣な気持ちが見えるような気がした。

ちゃんと休んで足を治すように、そして、最後の大会に共にかけようと呼びかけているような気がした。

彼女は小さく答えた。

「うん……そうする」

武司の目が急に穏やかになった気がした。

彼は立ち上がると言った。

「じゃあ、俺、コーチに言っといてやるよ。早く治せよ」

「うん。ありがとう。本当はね、わたしもこうするのがいいって思っていたの。だけど、どうしても思いきれなくて……本当に、ありがとう」

「別に、いいよ。……立てるか？」

彼は少し照れながら手をさしだした。綾子はその手を取って立ち上がる。

「ごめんな、さっきは、二度も足首押して」

武司が謝った。

「ううん、いいの」

「じゃあ、早く戻ってこいよ」

彼はそう言うと彼女から離れて歩いていく。

その姿を見送りながら、綾子は心の中でありがとうと繰り返した。

綾子はその日から治療に専念した。

大会まで後10日程しかなかった。

早く治さなければ、そうしなければ大会に間に合わない。

彼女は外科から電気治療まで出来る限りの治療に通った。しかし、数日間我慢して無理な練習をしたため、さらに治りにくくなっていた。

その間も足に負担のかからないように軽いウェイトトレーニングだけは続けていた。けれど、彼女は早く走りたくて仕方がなかった。

しかし、走れないまま一日一日が過ぎて行く。

彼女は、なかなか治らない焦りともどかしさで一杯になって、時々やけになりそうになった。

もういい。

もうこれでいいから、走ろう。練習はじめよう。

でも、そんな時決まって、あの時の武司の瞳が浮かんで来た。

その瞳は「ちゃんと完治するまで我慢しろよ」と彼女に訴える。それが、綾子を思いとどまらせた。

けれど、やはりもどかしくて、知らず知らずのうちに涙があふれてくるのを綾子はどうしようも出来なかった。

そんな昼休み。

「ほんとに水臭いんだから、綾子は。怪我してるんなら、そう言ってくればよかったのに」

「う、うん。ごめんね、敦ちゃん」

綾子は沈んだ気持ちでそう答えた。

敦子はそんな彼女の暗い表情を見て、なんと言っているのか分からなかった。

「.....それで、経過どうなの？」

言う前から敦子はしまったと思った。

訊かなくても彼女の表情を見ていれば分かりきったことだった。綾子は下を向いてしまった。

「敦ちゃん。.....わたし、走りたい」

彼女は顔を上げる。その目に涙が浮かんでいた。

「わたし、走りたい。走りたいの」

彼女は涙が零れ落ちないように少し上を向いた。けれど、その頬を涙が伝い落ちる。

「.....だけど、ダメなんだ。.....治らないの、この足」

悔しさと悲しさで綾子の肩が震えた。

その肩に敦子が手を掛ける。

「綾子、元気だしなさいよ。大丈夫だって、綾子なら、大丈夫。.....だから、焦らないで。治すことだけ、考えて、ね」

「敦ちゃん.....」

綾子は敦子の肩に抱きついた。涙が次々と溢れ落ちる。

「綾子、ほら、元気だしなさいよ」

敦子は綾子の背をさすりながら励ました。彼女の目にも涙が光っていた。

しばらくして綾子は少し落ち着いたようだった。

綾子は敦子の胸にうずめていた顔を上げて言う。

「敦ちゃん、三輪くんと同じ目をしてるね」

「え？」

「あのときの彼と同じだ」

敦子はよくわからないという顔をして、しばらく黙っていたが、思いだしたように言った。

「綾子の怪我、最初に気づいたの三輪くんだったわね。うん、そうだろうなあ。彼、いつも綾子のこと見てたから」

「え？」

今度は綾子が驚いた顔をする。

「本当よ。気がつかなかった？」

「うん……」

綾子は武司のことを考えてみた。

1年から同じクラブにいて確かに親しい間柄だった。でも敦子に言われたようなことは気がつかなかった。

けれど、彼が最初に自分の怪我に気づいたのは本当だ。

じゃあ、そうなのかな？ でも、なんで？

「三輪くん、綾子のこと、好きなのかな？」

敦子が少し笑いながらそう言った。

「ええっ？ うそ、そんなの……」

綾子は手を振って否定する。

その顔には笑顔が戻っていた。

綾子の怪我が回復して再び練習を始められるようになったとき、大会はもう目前に迫っていた。

彼女は失ったときを取り戻すためひたすら練習に明け暮れた。

しかし、すぐには身体もスピードも戻らなかった。

そのため、彼女はまた心の中に焦りともどかしさが広がっていくのを感じていた。

だめだ。

全然思うように走れない。

このままじゃ間に合わないよ。

最後の大会なのに。

これが最後なのに。

綾子の焦燥は募っていった。

大会の朝、よく晴れた青い空が広がっていた。

けれど、綾子の心は暗く曇っていた。

なんとかスピードが戻ってきて、どうにか大会の目処がついたものの、やはり不安が大きかった。

彼女は競技場についてからもみんなとあまり話さず、一人で考えていた。

最後の大会なのに……今日で最後なのに……

もっといい状態でやりたかった。最高の状態で走りたかった。

なのに……

あ～あ、こんなのじゃ、ちゃんと走れないよ。

走ったって、いい記録出せるはずないもの。

そう思うと、また涙が出そうになってくる。けれど、みんなの前では必死にこらえた。

彼女の200メートルは朝から予選があり午後に決勝が予定されていた。

綾子は予選二組で出場する。決勝へは2着以内に入らないと進めない。

フィールドで準備運動をしながら彼女は不安でたまらなかった。

予選落ちしたらどうしよう？

最後の大会なのに。最後の……。

不安が不安を誘い、どんどん落ち着かなくなってくる。

前の組が終わってスターティングブロックを調節しているときも、何度やってもしっくりこない。

そのうち合図があった。

彼女はどうしてもしっくりこないブロックを気にしながら、位置についた。

せめて決勝に残りたい。

彼女の頭にその考えがよぎった瞬間、号砲が響いた。

皆が一斉にスタートする。

彼女の身体は意識より先に反応していた。

スタートダッシュからコーナーを回るあたりで、2位につけていた。

しかし、綾子は走りながら身体が思うように動かないことに焦っていた。

手足のバランスがバラバラで、少しもスピードに乗れない。

ああ、ダメだ、ダメ……

それでも、必死で手足を動かす。

コーナーを回り終わり直線に入ったとき、綾子は誰かに追いつかれたのを感じた。

負けたくない！

その思いが瞬間的に意識にのぼる。

そのままゴールに飛び込んだ。

綾子は自分が何着で入ったのか分からなかった。
それを確かめようという気も、すぐには起きなかった。
なんだか、今自分が走ったことがうそのようで胸の鼓動の激しさだけが伝わってきた。
しばらくして思いだしたように考えた。
予選落ちだろうな。
そうして、おそるおそる掲示板を見る。
一瞬、信じられなかった。
2着の項に自分の名前が在る。
彼女はふーと息を吐いた。

200メートル決勝は午後の部の早い時間にある。
綾子はそれまで同じクラブの者たちが集まることになっている店で、昼食をとっていた。
昼からすぐのレースのことを考えて昼食は少し控えめにした。
そして、また物思いに沈んだ。
なんとか決勝に残れたけど、この後、どうやって走ったらいいんだろう？
こんなに身体がバラバラで、いったいどうやって走ればいいのか？
どうやって……

「綾子、おめでとう。決勝がんばってね」

そう声をかけたのは敦子だった。

「え？ あ、うん……敦ちゃん、どうだった？」

「わあ、ひどいなあ。見てくれなかったの？ わたしも残ったのよ」

「ごめん……。敦ちゃんもがんばってね」

その時、男子部員がドアを開けて店に入ってきた。

振り向いた綾子とその中にいた武司の目が合った。

彼は軽く笑いかけたが綾子は返すことができなかった。

彼らが綾子たちの隣のテーブルに座ったとき、武司は綾子からはなれた斜めの席に座った。

部員たちはお互いに自分たちの成績を報告し合い、昼からのことを励まし合った。

その中で、綾子は無理に平静を装っていた。

そうして、不安をおしゃべりの中に忘れようとした。

そんな彼女の姿を武司はあまりしゃべらず、ずっと見ていた。

午後、綾子たちのクラブの者はスタンドに上がって最初の種目を観戦していた。
みんなと一緒に綾子はぼんやりとトラックを見つめていた。

今、彼女の心の中には何もなかった。

決勝のことも、どうでもいいような気がしていた。

ただ、ぼうっと獺とした不安を感じながらフィールドを見つめている。

「さ、綾子、がんばりなさいよ」

「え？ ああ、敦ちゃん」

「なに、ぼんやりしてるのよ？ もう、そろそろいかなきゃいけないでしょう？」

「う、うん……」

「さあ、早く」

そう言って敦子は綾子を送り出した。

けれど敦子は、綾子の姿に不安なものを感じた。

どうしちゃったんだろう？

全然やる気になってないみたい、綾子……

綾子はスタンドの階段をぼんやりした足取りで登り通路への出入り口に来た。

誰かがその壁にもたれていた。

「綾ちゃん」

その声で、はっと彼女は我に帰った。声のした方を振り向く。

「……三輪くん？」

武司が彼女を見つめていた。

「綾ちゃん……自信持ちなよ。もう君は、いつも通りなんだから」

その言葉に綾子はびっくりした。今日の自分の自信のなさを彼に知られている。やっぱり、よく見てる。

「うん……だけど……わたしね、不安なの。さっきも全然動けなかったの。少しも自分の身体じゃないみたいなの」

今までみんなに隠していた気持ちを綾子は自然に口にしていた。

武司の前では隠し事が出来ない気がした。

「決勝なんか出たくない。どうやって走ったらいいのか、分からないもの」

綾子はつぶやくようにそう言った。

「綾ちゃん……」

武司が何か言おうとしたのを遮るように綾子が続ける。

「もう、いや！ もう、走れない！ ねえ、三輪くん、どうしよう？ 棄権してもいい？」

「ばか！」

突然、武司が怒鳴った。

綾子はびっくりして彼を見つめる。その瞳があの時と同じように厳しかった。

「あんなに走りたかって言ってたのは、誰だよ！ 泣くほど走りたくて、必死でこらえていた

のは、誰だよ。綾ちゃんだろ。もう治ってるんだろう。もう思いっきり走れるんだよ。だったら、それだけでいいじゃないか。走れない辛さ忘れてないだろ。走れるうれしさだって分かるだろう」

武司がいったん言葉を切って思いたすように言う。

「俺だって前に一度あったから……走れなかったことがあったから……だから、綾ちゃん、思いっきり走ればいい。それだけで、いいんだよ。そうだろう？」

綾子は涙があふれてくるのを感じた。

脳裏に辛かった日々や敦子と一緒に泣いた出来事が浮かんできた。

でもその後で、ふっと心が軽くなった。

まるで曇っていた心が晴れていくようだった。

「三輪くん……ありがとう」

涙を拭きながら彼女は言った。武司が笑いかけてくる。

「決勝、がんばれよ。俺……綾ちゃんの走る姿に憧れてるんだから」

「え？」

彼は少し照れくさそうに、

「さあ、最後のレースだから、3年間やってきたことをすべてぶつけるつもりで行ってきな」

「うん！」

彼女はさっきまでとはうってかわった明るい声で答えると、手を振って通路へ駆けていった。

女子200メートル決勝の合図がかかった。

綾子は予選の時とは全く違った気持ちでいた。

スターティングブロックに心地よく足を載せる。

前方に続く白線だけが鮮やかに目に映って、今このスタートラインに自分だけがいるような気がした。

周りの物音も聞こえなかった。

その静けさの中で号砲が響いた。

身体が瞬間的に反応する。

飛び出した彼女の脳裏には、ただ走ることしかなかった。

目に映る果てしなく続く白線を追いかけて。

静寂の中、彼女は一人走っていく。

やがて、その先にゴールの白線が見えて——越えた！

と思った瞬間、綾子の耳に急に歓声が聞こえてきた。周囲の音が戻ってくる。

そして綾子は、自分の前を駆ける一人の少女を認めた。

……2着だったのか。

そう思うと、綾子はそのままスタンドで見ているみんなのところへ駆けていった。

敦子が手を振っている。

「綾子！ 惜しかった。2着だよ」

「ううん、敦ちゃん、十分だよ。2着に入れてうれしい！」

「うん、そうだね。おめでとう！」

綾子は敦子と握手して、それからみんなと次々タッチしていく。

何人目かで武司とタッチした。

「綾ちゃん、おめでとう！ 素敵だったよ、君の姿」

綾子はあらためて彼に手を差し出した。

「三輪くん、わたし、あなたに何て言ったらいいのかな。わたし、とっても感謝してる。ありがとう！」

そのとき武司が目で合図した。

彼女が振り向くと掲示板に順位とタイムが表示されていた。

「あっ、記録……」

綾子は自分が自己ベストを更新したことを知った。

彼女はしばらく掲示板の表示を見つめていた。

ふたりの手は、その時、固く結ばれていた。

おわり